

## 文革中の謝冰心

その他のタイトル	Xie Bingxin in Great Cultural Revolution
著者	王 炳根, 萩野 脩二
雑誌名	關西大學文學論集
巻	55
号	4
ページ	111-130
発行年	2006-03-06
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10112/12534">http://hdl.handle.net/10112/12534</a>

# 文革中の謝冰心<sup>1)</sup>

王 炳 根<sup>2)</sup>  
萩野脩二訳・注

1966年から1976年にかけて、中国は10年の文化大革命を経験した。これは民族全体の大きな厄難であり災難であった。この災難の中で、著名な作家である謝冰心(1900～1999. 以下、冰心と略称する)も数々の苦難を受けた。この時、冰心はすでに70歳を越えた老人になっていた。しかし、彼女は最終的にはこの難関を乗り越えたのであり、全国の人民とともに、新時期の曙光を迎えたのであった。

文革中の冰心について、前期、中期、後期の3時期に分けて紹介したいと思う。

## (一) 前期 (1966—1969)

文革の開始期については、紅衛兵の「造反」、「家探し」、「批判闘争」、「大交流」をメルクマールとする。冰心は文革が始まるとすぐ、攻撃を受けている。

### 1. 家探しと展覧会

「家探し」の過程は、冰心の日記残片の記載による。<sup>3)</sup>

1966年8月27日、中央民族学院の予科1部の紅衛兵が「家探し」をする：「毛沢東思想と合わない何冊かの本を持ち去った。『警世通言』などや、『関帝廟靈籤』、ソ連修正主義作家の作品など。韓素英(因)、欧陽山、周而復などの作品は除外された。彼らは、電話は443だ。本があれば、いつでも差し出すように、と言った。」

これは第1回の「家探し」である。「家探し」には段階があって、決して始まるとすぐ「全てをかつさらった」わけではないことがわかる。

8月28日：「朝、宗生と下の娘のどちらも帰宅して来た。だれもが文化大革命について話し、必ず徹底しなければならない、特に私のような家庭は、必ず徹底的に古いものを壊して新しいものを打ち立てねばならない、と言った。私たちはまた、赤い紙を買って来て、新たに林彪語録を書いた。私たちは毛主席の像を客間の中央に掛け、両側には語録を貼り付けた。昼食後、下の娘夫婦は学校に戻り、凌霞は夕食後出掛けた。宗生は天津に帰る切符が買えなかったので、明日の朝出掛けることに決めた。私は予科1部の紅衛兵に宗生が出掛けないことを報告した（電話で）。」

「家探し」は「古いものを壊す」ためである。毛主席の像と林彪語録<sup>4)</sup>を貼ることがすなわち、「新しいものを打ち立てる」ことなのである。日記の中の「古いものを壊して新しいものを打ち立てる」という言葉がこのことを指している。

ここに言う「宗生」は息子の呉平のことである。（親族関係に着いては附図・冰心の親族図を参照されたい。これは牧野格子氏が作成したものに、萩野が手を加えたものである。）「下の娘」とは、次女の呉青のことで、「凌霞」は息子の嫁の陳凌霞のことである。「天津に帰る」のは、呉平は右派分子<sup>5)</sup>だったので、天津で下放工作に従事していたからである。この晩、ここ冰心の家に泊まるので、そのことを中央民族学院の予科1部の紅衛兵に電話で報告したのであるが、こういうところから冰心の恐れと、紅衛兵の厳しさが見て取れる。

8月29日：「朝、紅衛兵が呉文藻に毎朝4時間の労働に参加させた。午後、文藻は出頭しに出かけた。」

冰心の夫の呉文藻は、レッテルをはがされた右派<sup>6)</sup>であったので、文革が始まるとすぐ革命の対象となった。労働は懲罰の方式である。

8月30日：「朝、作家協会党総支部に手紙を送り、次のように要求した；賃金を止めること、自分の定期預金（全て）と、出国した時の衣裳、及び頂いた贈り物、また自分の装身具などを国家に返却すること。」

文革の情勢の圧力の下、冰心自身はお金も物品も全て国家に返した。これは

彼女の恐怖と絶望とを示している。

8月31日：「午後3時、北京外語学院毛沢東思想赤衛隊第4分隊の10数人が、家にやって来て書籍の中で毛沢東思想に合わないもの（封建主義、資本主義、修正主義の毒素のあるもの）を検査しに来た。また、その他違法な物品も検査した。最後に呉文藻の日記を持ち去った。表紙に蒋介石の写真があったからである。そして、8か条の問題を残し、大字報などを貼って出て行った。これは、青少年が私たちの思想上の牛鬼蛇神<sup>7)</sup>を綺麗さっぱり拭い去ろうとするものだ。必ずしっかりと受け入れ、彼らと一緒に自己に対して革命しなければならぬ！」<sup>8)</sup>

この「家探し」は27日より厳しい。特に呉文藻の日記が持ち去られた。問題がかなり深刻になる可能性があった。というのも、呉文藻の日記には多くの事柄が書かれていたからである。（この持ち去られた日記は、後に返却された。呉文藻が書いた字が小さく、事柄が多くて、熱狂的な造反派たちは読んでいる暇がなかった。それで、日記によって罪を加えられることはなかった）。

9月1日、全面的に「家探し」をされる。写真、記念品、衣服、時計、書画など一切の物品を全部持ち去った、いかなる登記書も、いかなる受領書もなかった。彼らは何の役にも立たないと看做すと地面に投げ捨て、面白いと感ずると自分のポケットにねじ込んだ。<sup>9)</sup>

「家探し」の基礎のもとに、9月6日、紅衛兵は「謝冰心ブルジョア階級生活方式展覧会」をおこなった。探し集めたもの、甚だしくは他人のもの（お盆一杯に盛った旧1円銀貨<sup>10)</sup>、腕時計3個、海外訪問の際に着たチャイナドレス、絹のストッキング、革靴、アルバム、写真、記念品など）、全て陳列して展示した。冰心は「ブルジョア階級の黒い作家謝冰心」と書かれた大きな看板を掲げさせられ、頭を垂れて陳列場の入り口の烈日の下に、数時間もの長きにわたって立たされた。

## 2. 批判闘争

初歩的な統計によれば、文革初期、冰心は5回批判闘争を受けたことになる。

そのうち、集団で受けたのが3回、単独のは2回である。

先に、集団で受けた方を紹介しよう。

第1回は、8月18日である。冰心は造反派によって中国作家協会の所在地である、北京東総布胡同に引っ張り出された。その中庭は騒然としており、当時の作家協会の指導者も著名な作家もその場にいた。彼らはそれぞれ別に造反派が出した問題に答えた。冰心の順番になった時、緊張から質問に答える際、新聞社「報社」というのを古い言葉「報館」と言ってしまった。造反派はこの時とばかり咎めて、冰心が「頑固に国民党の立場を堅持している」としたので、冰心はすぐさま釈明して、「私は国民党に反対した者だ」と言い張った。しかし、造反派は聞き容れず、「お前が国民党に反対したのなら、どうしてまた国民党の言葉など使うのか」と言った。冰心は、この言葉は国民党専用の言葉ではない、ただ古い言葉に過ぎない…と言ったのだが、造反派は彼女が詭弁を弄していると看做して、頭を低く垂れて罪を認めるよう要求した。

第2回めは1968年の夏のことである。造反派は、作家協会の「牛鬼邪神」を北京南郊の紅星公社に連れて行き、夏の収穫を手伝わせた。太陽がぎらぎらする午後、造反派が盛大な批判闘争大会をおこなった。土の台の上に、一方には地主、富農を、一方には作協の有名な作家や評論家そして指導者を立たせた。それらの人々とは、冰心、張天翼、臧克家、張光年、李季、郭小川、侯金鏡、馮牧、陳白塵、巖文井などのことである。造反派は批判して、「これら精神貴族となった作家たちは、土地のない地主であり、工場のない資本家だ」と言った。冰心は「スチュアート<sup>11)</sup>の義理の娘だ」と批判された。

第3回めは、1968年の秋である。北京北郊の良種場で労働していた。全国文連と作協の著名な作家や芸術家がここで労働していた。ある日の午後、造反派は文連や作協の「牛鬼邪神」を集め批判大会を開いた。批判する人間はとて多かつた。批判される人は自ら自分の出身を報告した。冰心はそのうちの一人であった。その批判闘争会では、ある作家が出身を報告する時、「私は貧農出身です」、「私は毛主席を熱愛しています」などと言ったので、直ちに殴られたり蹴飛ばされて、警告された。このような状況下でも、冰心は相変わらず達観

した精神状態を保っていた。当時彼女と一緒に労働に参加した美学者の王朝聞は、こう書いている。

☆今世紀20年代に『小さな読者へ』<sup>12)</sup>などを出版して読むことの出来た冰心先生の文学作品は、その作品中にある、溢れるような童心に深く染まったものだ。文革の初め、北京郊区の農場の土壌改良労働に参加した。当時冰心老人は私と同じで、決して神話的でない生活環境にいたのだが、相変わらずその真摯な童心で同じ労働する者に影響を与えた。文はその人の如く、人はその文の如し、とは真に然りである。<sup>13)</sup>

単独で批判闘争に掛けられたのは2回ある。第1回は9月6日である。つまり、これも「謝冰心ブルジョア生活方式展覧会」でのことである。始まると直ぐ、造反派は冰心にこれらの品物の来歴を白状するように要求した。冰心は言った。ここにある多くの品物は自分の物ではない。たとえば、大きな盆に盛った1円銀貨、さらには腕時計も1個は自分のものだけけれど……。冰心の言葉がまだ終わらぬうちに、造反派は拳骨を振り上げて、高らかに叫んだ、「謝冰心の言い逃れを許すな！」「謝冰心を打倒せよ！」「謝冰心の酒に酔い金銭に迷った生活を、徹底的に白状させるぞ！」などと。まったく冰心に釈明する機会などないまま、それから批判の発言が続けられたのである。

第2回は1966年11月のある日の夜のことである。造反派は冰心を単独の批判闘争に掛けた。はじめ冰心は思想認識について話したが、造反派は直ぐ批判を始めた。造反派が言うには、お前の自白は、客観的な方向に進めていき、主な内因、つまりお前自身の問題については、却って深く掘り下げない。たとえば、お前と蒋介石や宋美齡<sup>14)</sup>との関係はどうなのかとか、スチュアートを恨んでいるのかどうか、など。さらにこう言った、「お前は日本帝国主義には近寄らなかったと言うが、それは正確ではない。お前のような奴は、思想面で日本帝国主義と接近しないでいることは不可能だ。歴史はお前自身で書いたもので、抹殺しようにも抹殺できない。正しく認識しなければならず、無駄話をしているのではない。必ず頭を低くして罪を認めねばならず、必ず魂に触れねばならない。」と。

別の一派が発言してこう言った、「謝冰心、お前は過去に革命しなかったが、実はそれが反革命なのだ。本当に3つの山<sup>15)</sup>のために奉仕したのだ。お前の以前の作品は、3つの大きな山にどのように奉仕したのか？その害毒はどこにあるのか？正直に答えなければならない。」などと。

批判大会では、冰心に以下の問題を答えさせた。

1) お前は日本にいた時、どういった日本人と往来していたのか？帰国後、それらの往来は続いていたのか？どんな策略を弄していたのか？出国訪問の時、彼らとどんなことを話したのか？

2) 呉文藻が「駐日代表団」を離れたあと、お前たちはまだ1年日本に住んだ。この1年の間に、お前たちはどんな活動をしていたのか？どんな悪事を働いたのか？

3) お前は日本にいた時、地下党と関係があったそうだが、どんな地下党だったのか？誰と関係があったのか？時間や場所を。

4) お前は帰国する時、どうやってアメリカのイェール大学の旅費を受け取ったのか？いくらか？誰がお前に手渡したのか？何らかの任務をするよう言われたのかどうか？

5) アメリカ留学の経費の来源を白状せよ。どうやって手に入れたのか？

6) 1938年お前は雲南大学に行った。1946年には南京に戻った。この期間スチュアートとどんな政治的戦略を弄したのか？

7) お前が出国訪問した時、どういう毒を放ったのか…

最終的には、日本にいた時のことを無理に冰心に聞いてはならないと周恩来総理が言ったので、そこでやっとおさまったのであった。

### 3. 「牛小屋」に入れられる

時間は、1966年10月6日から1969年末まで。所謂「牛小屋」というのは、文革中の専門用語で、「牛鬼邪神」を拘禁するところである。

中国作家協会で拘禁された人員は：劉白羽、巖文井、張光年、張天翼、臧克家、冰心など20名あまりであった。初めは、頂銀胡同に閉じ込められた。つま

## 文革中の謝冰心（王）

り陳白塵<sup>16)</sup>の住まいである。後には、東総布胡同、作家協会の事務室の建物に拘禁された。拘禁された全ての人は帰宅が許されず、そこに泊まらされた。1967年の初め、家に戻ってもよくなったが、必ず時間通りに到着しなければならなかった。冰心は毎日いつも6時には西郊の民族学院から出発し始めるのだが、これは勤めに出る労働者よりもっと早かった。7時30分には東総布胡同に着いて労働改造を受け入れねばならなかった。

主な任務は、毛選（毛沢東の著作と語録など）を学習し、自己批判を進め、毎日4階の女子トイレの掃除をやり遂げることであった。

### （二）中期（1970年——1971年）

冰心は牛小屋に3年以上閉じ込められたが、その後、文革は、知識青年を「山に登り辺境に行」かせ、幹部を「下放労働」させる段階に進んだ。

下放させられる幹部は、かなり良い政治待遇なのである。もし下放さえ出来ないとなると、問題は一層深刻になる。周揚<sup>17)</sup>、夏衍<sup>18)</sup>などは、監獄の中にいる。そこで、当時もし自分の名前が下放幹部に、また五七幹部学校<sup>19)</sup>に行く名簿に載っていると、自分はまだ幹部の待遇を受けることが出来るということが表明されたことになるのだ。そこで、拘禁が長い人にとって言えば、五七幹部学校に行くことはとても良い行き先となるのである。彼らは往々にして達観的な態度でこれから始まる労働改造の生活と対峙したのである。

#### 1. 2回五七幹部学校に行く

第1回は、1970年1月5日である。冰心は湖北咸寧の中国作家協会の五七幹部学校に行った。魯家弯といい、昔は労働改造の農場であった。ここには、馮雪峰、沈從文、張光年、張天翼、臧克家、韋君宜、郭小川、冰心などがいた。軍事化した管理で、冰心は5連（中隊）に分配された。中隊長は李季<sup>20)</sup>であった。冰心は張兆和<sup>21)</sup>など6人と農民の薪を置いておく小屋に住んだ。

労働の任務は、石ころ拾い、牛糞拾い、畑を植えて監視することなどである。旧正月の間は、武漢に出て歯の治療をした。



2月11日にここを離れ北京に戻り、今度は呉文藻と一緒に湖北沙洋の中央民族学院の五七幹部学校に行く準備をした。咸寧の中国作家協会の五七幹部学校には、合計38日の期間いたことになる。

第2回めは、1970年6月6日に沙洋の五七幹部学校に行ったことである。冰心は1連（中隊）1排（小隊）2班（分隊）に分けられた。後に、呉文藻と再び5連2班に分けられた。労働の主な任務は、落穂拾い、綿花を植えること、綿花を摘むこと、野営訓練に参加すること、道路修理……などで、最後は文化室の管理員であった。1971年8月7日、ここを離れた。まるまる14ヶ月の幹部学校生活であった。

## 2. 「家族へ」手紙28通

冰心の「家族へ」<sup>22)</sup>という手紙は、大変具体的で詳細に書かれており、冰心が五七幹部学校の労働改造にいた境遇と心情とが記録されているので、非常に貴重な資料である。同時にまた高い文学的価値もある。私は、冰心の「家族へ」という手紙は、特殊な時代においても創作方法を堅持したもので、彼女の『小さな読者へ』<sup>23)</sup>という通信文の文革における使用である。同時に、彼女の言葉も文学的で、非常に親密な情の表現である。文革時期の通信文とまったく違っている。当時の手紙は、初めに毛主席の語録を1段書き、署名と押印の時は、毛主席の万寿無疆を祈らねばならなかった。文の終わりにも当然プロレタリアートの革命的な敬礼をしなければならない。ところが冰心はこういった流行の言い方を捨て去り、彼女の個性的な言葉を使用している。「親愛なる」「限りない愛をこめて」「貴方たちのことを十分思っています」など。こういった言葉の使い方は、『小さな読者へ』の風格と一致している。そこで、私は国内でこういった観点を発表したことがある。「家族へ」は冰心が特殊な時代に堅持した親密な情の創作で、非常に高い史料的な価値を持ち、また高い文学的価値を持つ作品である、と。

ここに、1通引用して、当時の生活と創作の風格を見てみよう。

☆親愛なる家族へ：

## 文革中の謝冰心（王）

ここに来てからはただDaddyと宗生の手紙を受け取っただけです。大きいと小さいのと娘二人がどうなのかわかりません。実のところ、湖北は江西ととても近いのですが、ただ私は別に手紙を送ります。言葉はまだ言い終わらないのに、生活はとても忙しくて、暇がありません。

私の荷物はとうとう16日の夜に着きました。今回は劉得風同志<sup>24)</sup>がたくさんの品物を護送してきました。私の荷物もその中に入っていましたから、すべて無事でした。ただスーツケースの取っ手が1つ引きちぎられていました。今、たくさんの物を取り出しました。昨晚練乳を飲みました。今朝は肉のデンプ<sup>25)</sup>を食べました。でも、こういった物が届く前だって、私は上手くやっていました。途中持ってきた1缶のビスケットは、まだ食べ終わっていません。

私たちの今の労働は、野菜畑の管理です。肥やしをやり、地面を掘るなどの仕事です。一日中外に出ています。部屋は狭くてとても寒いのです。みんなが持ってきた布団はとても部厚いのですが、ここは湿って、湿気ているので、晴れた日があると布団を干しますが、夜横になると冷え冷えするのです。私は夜、3枚も布団を掛けていますが、暑いとも感じません。今、自分のものが到着したので、公の布団2枚と、同室の人の掛け布団と敷布団は全部返しました。私が思うに、北京の家の綿の切符は5斤あったでしょうか？綿の切符がもし4斤か5斤あれば（私は私用の補助が、2回ですでに2斤あったと思うのです）、直ぐ送ってください。送ってくれたら、ここの綿の切符に換えることができます。4斤の綿切符で4斤の布団綿が買えます。もし5斤の切符ならば、6斤の布団綿が買えるのです。こう推算していくと、私は現在の布団綿を取り替えて敷布団を作ることができます。私の布団は上下とも薄すぎるのです。

ここに来てから考えることはたくさんあります。今日は大日曜日（2週間ごとに丸1日休む日曜日）なので、みんな洗濯などをしています。私は昨日1日野菜畑で腰を曲げていたので、また荷物や布団などの整理でいささか疲れしました。おまけに、4、5里ある川べりに行って水を担いだり提げたりし

て運んで来なければなりません。他の人に行かせるのは申し訳なく思います。みんなは自分のことで忙しいです。私は住んでいるところから一番近い「井戸」を見つけておいたので、これから時間があれば一人で洗いに行けます。水道があるところや井戸があるところにおいては、農民生活の厳しさが本当にはわかりません。私たちの小屋は、或いは分隊と言ってもいいでしょうが、貧農下層中農が仕事をしている時、彼らに代わって水汲みをしてやるのです。女性も順繰りに毎日1回担ぎます。私と張兆和はやや年かさなので、ただ環境衛生のことをやれば良いだけです。家主のために庭掃除をします。毎日起きると直ぐ掃除します。7時から8時は毎日読書です。9時から仕事です。中間に1回休みがあります。12時に仕事が終わる、午後1時半にまた仕事をやります。中間に休みがあり（この時も畑で新聞を読むのです）、5時半に仕事が終わる、夕食です。労働をしない日は2回（9時と4時）食事するだけです。日曜日もうこうします。……。

結局、生活はとても厳しいです。全て適応するのは困難があります。1つには準備が不十分だからです。2つには実地に来なければ、実際の状況はとても想像出来にくいからです。私は、沙洋にはいつになったら家が出来たろうかと思っています。文藻はいつ行くのかわかりません。私たちのところでは、もともと年末には新しい家に入ると言うことでしたが、別の組織である出版社が入ってしまいました。私たちはもしかすると70年の末まで待っても、別の組織が入ってしまうかもしれません。また家族が一緒になく、集団で別れて住むのかもしれない。沈従文<sup>26)</sup>がそうでした。……事柄を余り暫定的に見てはいけないと思います。同時にまた早めに準備しておかねばならないでしょう。今は沈おばさん<sup>27)</sup>が比較的ヒマです。私たちはグリーン・スーツケースのようなもので、きっと麻の袋の蔽いを作って、中国式のボタンを使って、この前のような簡単なもの（陳恕<sup>28)</sup>が言う甘家口<sup>29)</sup>で作ったもの）ではダメです。運んできた物の損傷が激しい可能性が大ですから。ここの運搬道具と人員は皆内輪の者です。たくさんの品物が駅から幹部学校までに投げて壊されました。文藻の本は早めに整理しておかねばなりません。私自身、

物を整理するのはとても緊張します。同時にとても気を使うので（家族全体のものを分類しなければなりません）、忙しさと疲れとがこもごも加わり、怒る時があれば、恨む時もあるで、精力を消耗してしまいます。全て戦争に備えるという観点から、一切を観察し、検査しなければなりません。モタモタしていることは許されません。小四<sup>30)</sup>が経験したことは調査したら良いです。そうでないと、1週間1週間と過ぎていって、いつかいつかと思っているうちに、後悔しても及ばずということになってしまいますから！

昨日、宗生から手紙が来ました。彼は旧正月には家に帰るだろうと言っていました。勿論良いことです。みんなが集まりを持つのです。今度の旧正月は革命的な正月を過ごすことを希望します。お正月用品を買って、食べたり飲んだりしてテレビを見るのではなく、Daddyの荷物整理を助けたり、物を購入したり、結んだり縛ったりするのです（沈従文など今回は彼の息子が付き添って来ました）。そうしないと、接待や飲み食いに忙しくて、ひとしきりドタバタして何もできなくなってしまいます。宗生の手紙によると、住むところを捜すつもりようです。このことでたくさんお金を使わないで欲しいものだと思います。……これからはきっと出来るだけ儉約していかねばならないでしょう。こういう過渡期が余り長くならないことを！

作協の劉徳風<sup>31)</sup>はもうじき戻ります。私は彼に小さな電池を持ち帰るよう頼みます。もし換えることが出来るなら換えてください。出来ないならそれで結構です。もし大きな電池があれば、つまり大きな懐中電灯の電池です（この前、陳凌霞<sup>32)</sup>さんが要るかどうか尋ねてくれた物です）。これはいつでも作協に渡すと誰かが持ってきてくれます。それと、ビニールシートは必要です。大きいのも小さいのもどれも使い道があります。誰か買って持って来て下さい。……

私はこの地で結局のところ上手くやっています。風邪も引いたことがありません。たとえ疲れていても、一晚寝れば良くなります。食べるものも飲むものも大問題になっていません。……私は努力して出かけます。同志たちに学び、貧農下層中農に学びます。70歳から生命が始まります。しっかり磨き

をかけ始めましょう。

今日は日曜日、鋼鋼<sup>33)</sup>は家にいることでしょうか。一人でふさいでいませんか？山山も江江もみんな家にいることでしょうか。私は、お姉さん<sup>34)</sup>のところは、きつとこことあまり違わないと思っていますよ。きつと大洗濯をし、大仕事をしていることでしょうか。丹丹は農民の子と一緒に外を駆け巡っていることでしょうか。彼は早く始めたのですが、それが良いところとなるでしょう。本当に、貴方たちのことが忘れられない。手紙は見たら直ぐにまわしてください。

今夜、お姉さんからの手紙を受け取りました！

母 1月18日（1970年）

### （三）後期（1972—1976）

1971年8月の初め、冰心と呉文藻は北京に戻った。同時に費孝通<sup>35)</sup>なども戻って来た。直接の理由は、中国が欧米諸国と長いこと閉ざしていた門を開けようとしたことにある。アメリカの大統領ニクソンが中国を訪問しようとしていた。西方を理解するために、またニクソンを理解するために、中央はニクソンの『6つの危機』を翻訳しようとした。ほかに、アメリカのハース、モーウェン、ウェイラン共著の『世界史』やイギリスのH.G. ウェルズの『世界史概観』もあった。これらの書物は翻訳がきわめて難しく、単に造反派の革命精神に頼っているだけでは翻訳できないものであった。当時は大学がすでに授業停止であったし、あらゆる知識分子も皆五七幹部学校で労働改造していた。そこで、周恩来が自ら名前を挙げて、冰心らの中国と欧米の学問に通じた大学者や作家を北京に呼び戻し、彼らにこの翻訳の任務を完成するようにさせたのであった。

北京に戻ってからの冰心は、気持ちも緩やかになった。自分がまた有用な人間であることを実感した。かつて反右派闘争を経、文革の批判闘争を経験した何人かの大知識分子と一緒に集まったことに、無限の感慨を覚えた。滄海が桑畑に変わると言う世の移り変わりの激しさを大いに感じ、心からこの機会の貴

重さに思い至った。この時の時間は、冰心からすれば、彼女の一生で一番安定した時期であった。彼女は自らこの時の生活をこのように描写している。

☆その何年かの私たちの翻訳の仕事は、10年の動乱の歳月の中で、最も安穩で、最も快い日々であった！私たちは民族学院の研究室のある3階で、机に伏して一気にものを書いた。私は文藻の机と向かい合い、その他の人は私たちの隣の部屋にいるか、時には傍らにいた。文藻は私と毎日早起きし、8時に仕事場に着いた。12時に家に帰り昼飯、食後2時にはまた仕事場に戻った。午後6時になってやっと家に帰った。その時の私たちの生活は「規則的」そのものだった。みんなは安定を感じて、時間を無駄に過ごさなかった！今振り返ってみると、当時はおかげさまで「なんでも全て廃止する」時期であった、そうでなければ後になって非常に忙しくなる私たちのような何人かを一箇所に集めて、この優に数百万言もある大著を翻訳させるのは、容易なことではなかったろう。<sup>36)</sup>

彼らの訳本の質は本当に高く、権威ある作品となった。何十回と版を重ね、現在でもまだ再版を続けている。

この時期、冰心は社会活動に参加し始める。彼女が接した外国の賓客には、ポーランド、イタリア、アメリカ、デンマーク、インド、ネパール、スーダン、日本、スイス、レバノン、カナダなどの国からやって来たお客がいた。当時、冰心の住まいは非常に狭く、60平米の広さであり、中央民族学院の賓客接待室で接待するほかなかった。同じ頃、学校も学生募集を始めたので、冰心は少数民族の学員<sup>37)</sup>と座談会を持つ時もあった。また、人民代表大会代表の身分で、人民代表大会或いは中国民主促進会が組織する参観団にも参加し、国内を参観訪問した。たとえば、雲南、陝西などである。この時期、生活が好転したことを、彼女自身が記録した「家計簿」<sup>38)</sup>から見る事が出来る。冰心は、人民代表大会の代表と政治協商会議委員が特別に供給される商店から、当時としては極めて贅沢品であった、「大前門」という高級タバコやコーヒー、チョコレートなどを買うことが出来た。

1972年、毛沢東の「延安の文芸座談会における講話」発表30周年を記念する

ために、冰心は「私たちはまだ若いから」という詩を作った<sup>39)</sup>。4月28日中央民族学院の壁新聞に真っ先に発表された。後に、「中国新聞社」の記者が彼女を訪問した時、この詩をあわせて公表した。それが国内外で大きな反響を呼び起こした。文革中、アメリカにいた謝冰瑩<sup>40)</sup>は文章を書き、冰心は呉文藻と二人揃って服毒自殺をした、と言った。また、台湾にいた梁実秋は「冰心を想う」<sup>41)</sup>という文章を書いた。この「私たちはまだ若いから」という詩が発表されると、海内外の友人たちは初めて冰心がまだ健在であったことを知った。アメリカの趙浩生<sup>42)</sup>や聶華苓<sup>43)</sup>などが、前後して専ら冰心に会うために北京にやって来た。その時の冰心の思想状態はまだ文革中から反省できていなかった。公開の場合は、使用する言葉も文革と一致させたのである。趙浩生が彼女に文革についてどう思うか聞いた時、彼女はこう答えた。

☆この文化大革命は、4つの古いもの<sup>44)</sup>を革命するものですよ。古い風俗、古い習慣、古い文化、古い思想です。これらは私たちの生活の中にあります。私たちのようなもの書きこそ4つの古いものがあるのですよ。若い人たちは4つの古いものは良くないと感じて、やって来ては私たちと話します。話し合いです。何の怖いことがありますでしょう？<sup>45)</sup>

聶華苓が、反右派闘争の時のことを話すよう求めると、冰心は「反右派でやられた人がいるのは、その人が政治をやったからです。反右派闘争はみんなが賛成しています」<sup>46)</sup>と認めた。そして、「丁玲<sup>47)</sup>が右派とされたのは、丁玲が反党集団に参加したからです。右派であるだけではないのです。」<sup>48)</sup>とも言った。

この時期、冰心は中日の友誼を描いた「桜と友誼」<sup>49)</sup>を発表もしている。

1973年4月16日、冰心は中日友好協会訪日代表団に参加した。これは中日国交正常化後の最初の日本に行く大型友好代表団であった。日本各地からの要請の電報はとて多く、代表団は4つのコースに分かれねばならなかった。合計すると、日本の38の都道府県を訪問した。

冰心は、大阪から山口へ行くコースに参加した。一緒の人員には、楚図南、榮毅仁、李季、張瑞芳、周一良などがいた。福岡県博多市の伝統的な祭りに参加し、長崎では龍の舞いを観覧した。沖縄の那覇市では古装の舞踏を鑑賞した。

## 文革中の謝冰心（王）

新劇人との懇談に参加し、京都大学では座談会をし、倉石武四郎先生<sup>50)</sup>にお会いした。この時の日本訪問は33日になる。

文革後期の冰心は、基本的に行動の自由を回復した。しかし、思想の自由は、「4人組」粉碎後の、中国の思想解放運動の後のことである。それ以後、冰心は新たな創作の境地に入るのである。

### 結論

1. 冰心は文革初期と中期において、襲撃を受け、批判闘争を受け、五七幹部学校に2回行き労働改造をした。しかし、彼女は最悪の状態ではなかった。これは、彼女が文革前には辺縁のところにいるからであろう。そして、人柄として人付き合いが良く、控えめに身を持したことと関係があるだろう。また、周恩来総理の配慮と保護とも関係があるだろう。
2. 冰心は、文革の厳しい圧力の下、基本的には逆境におとなしく従う態度を取った。思想と観念において文革のルールを逸脱することがなかった。さらに、極端な手段を取らなかったし、老舍<sup>51)</sup>のように極端な手段で極端な凶暴さに立ち向かうことはなかった。
3. 冰心は文革のような環境の中でも、相変わらず心持を闊達にし、気持ちをのびやかにして、積極的な生活態度で苦難に立ち向かった。「家族へ」という手紙と「私たちはまだ若いから」という詩がその時期の作品と看做せるだろう。

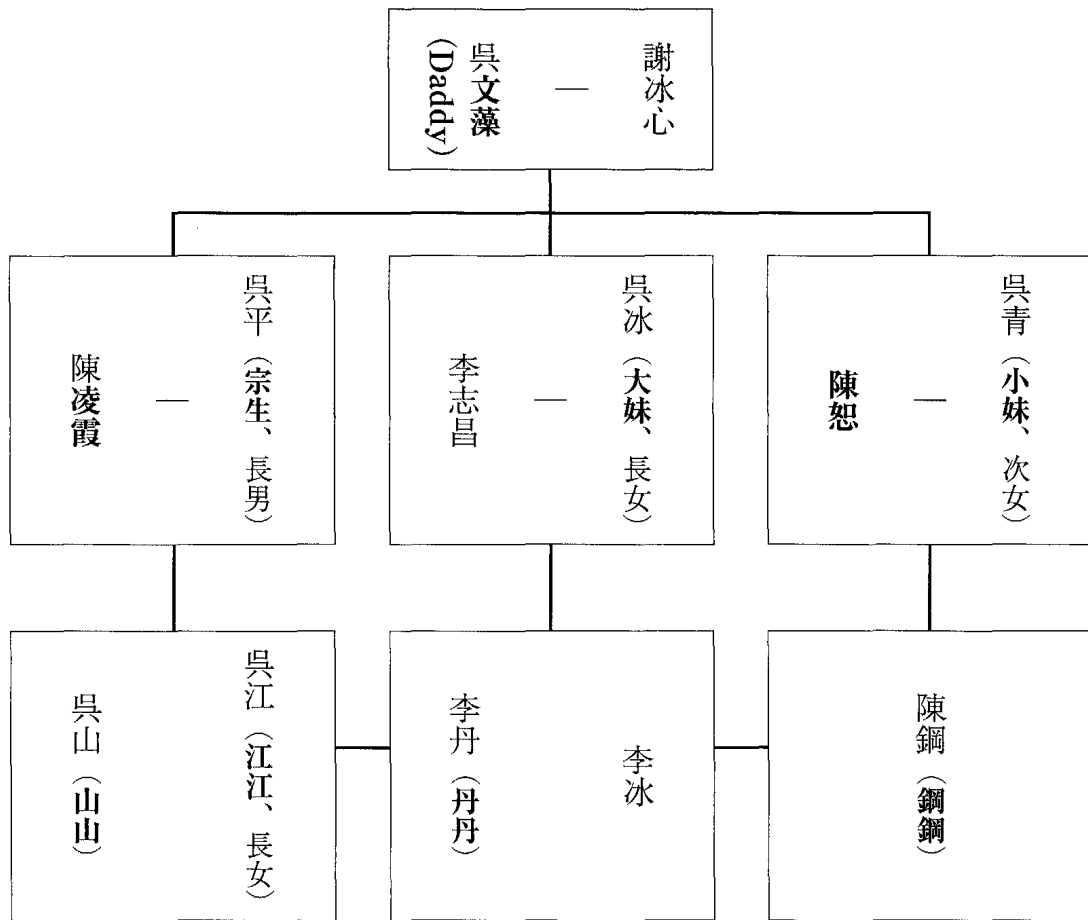
文革収束後、多くの人が文革の罪行を控訴したが、冰心は却って声を張り上げ力を尽くして訴えるようなことはなかった。彼女はこう認めている。当時は民族全体が災難にあい、国家主席さえ迫害されて死んだ<sup>52)</sup>。一人の作家がいささかの罪を受けたからといって何ほどのことがあろうか。なるべく早く創造の姿勢を以って生活に立ち向かうべきだ。

彼女には、「生命は80歳から始まる」という名言がある<sup>53)</sup>。冰心は、80歳を迎えてからまた一つの創作の高まりを迎えたのであった。

2005年10月13日、日本関西大学にて



附図：謝冰心親族図（太字は本文に出てくる人物）



(牧野格子作成)

注

- 1) この講演記録は、2005年11月26日、京都の「現代中国研究会」（吉田富夫・仏教大学教授主催）で王炳根氏が報告したものである。通訳は、牧野格子氏であった。ここでは、それとは別に萩野が新たに訳出した。
- 2) 王炳根（1951.10.1～）江西進賢生まれ。南京大学中文系卒。中国作家協会会員。国家1級作家。中国冰心研究会秘書長。現在福建省長樂市にある冰心文学館の常務副館長。  
2004年2月に、謝冰心の遺留品を冰心文学館に搬入することに成功した。  
2005年10月1日から2ヶ月間、関西大学招聘教授として関西大学文学部に來、冰心の遺留品の整理状況などを報告した（受入担当：萩野脩二）。招聘教授受入を許可して下さった、関西大学及び国際交流センターと文学部に感謝する。
- 3) 『冰心文革日記』と称する。「紅色八月」と言われた1966年8月の時の数ページが残っている、という。2004年、冰心文学館が冰心の遺留品を整理している時に発見したもので、大変貴重なものである。今回この講演で初めて発表された。この講演の意義の一つは、この新たな資料の紹介にある。

以下、引用の「 」は、この『冰心文革日記』からの引用である。ゴチック11ポイント

## 文革中の謝冰心（王）

を使って目立つようにした。

- 4) 1964年5月、林彪国防部長が解放軍内で『毛主席語録』を発行したが、一般には最初は『林彪語録』とも呼ばれた。
- 5) 1957年に、「百花齊放、百家争鳴」のもと、中国共産党の欠点をあげて批判した者のうち、一部の者は「反党反革命」的な言動をしたとして、「右派」に認定され、労働改造に追いやられた。  
冰心の息子の呉平は、1957年3月に右派分子とされた。1961年10月にレットルを剥がされた。
- 6) 呉文藻は1957年10月に右派とされた。その後、1959年12月に右派のレットルを剥がされた。この時の名誉回復という実態は、給料が回復されたただけであったと、王炳根氏は言う。
- 7) 妖怪変化を意味する言葉。1966年6月1日『人民日報』が社論「全ての牛鬼蛇神を一掃せよ」を発表してから、ブルジョア階級や右派を指して言うようになった。牛鬼蛇神として批判された者が拘禁された場所を「牛小屋」と言った。
- 8) 以上の5箇所（8月27日、28日、29日、30日、31日）が、残されていた日記からの引用である。
- 9) 卓如『冰心全伝』（河北教育出版社、2002年1月）下巻188頁
- 10) メキシコ銀で鑄造した、袁世凱・大統領の横顔を模様とした1元銀貨のこと。
- 11) John Leighton Stuart. 1876～1962. アメリカ人。ミッションスクール・燕京大学の学長などを務め、アメリカの駐中国大使を務めたことがある。冰心がアメリカに留学する際の学長であり、冰心が呉文藻と結婚した時の神父であった。詳しくは、拙著「謝冰心とスチュアート——燕京大学を中心に」（『関西大学 文学論集』第54巻第4号、所収）を参照されたい。
- 12) 原文は『寄小読者』。冰心の、アメリカ留学記である。北京の『晨报』という新聞の「児童世界」という欄に掲載された通信文。1923年から1926年まで29通の手紙が収録されて、1926年北新書局より出版された。冰心の代表的な作品であり、児童文学作品と看做されて、冰心も児童文学作家と称される。
- 13) これは、王朝聞（1909～2004）が1994年4月「冰心作品 害道と絵画大展覧会」に寄せた題字である。王炳根『永遠的愛心——冰心』（山東画報出版社、1994年10月）142頁、より。
- 14) 宋美齡（1901～2003）。宋家の3姉妹のうちの三女。蒋介石夫人。アメリカ、ウエルズリー女子大学卒。冰心の先輩に当たる。得意の英語を駆使して、アメリカで講演し、蒋介石の抗日の正当性を印象付けた。
- 15) 中国の新民主主義革命を阻害する3つの大きな山。1. 帝国主義、2. 封建主義、3. 官僚資本主義をさす。
- 16) 陳白塵（1908～1994）江蘇淮陰の人。劇作家。「カラスとスズメ」「阿Q正伝」など。
- 17) 周揚（1908～1989）。本名、周起応。湖南益陽の人。建国後の文芸界を指導した文芸評論家。中国左翼作家連盟の党書記を努め、30年代文芸を指導する。1949年以降、作家協会

- 副主席，党宣伝部副部長などの要職につき，文芸界を指導。文革では，一貫して反党修正主義路線をおこなったと批判された。1977年名誉回復。
- 18) 夏衍（1900～1995）浙江省出身。知日派の劇作家。30年代に左翼演劇活動のほかに映画運動も指導する。1949年以後は，中国文学芸術界連合会副主席など。文革では，修正主義文芸路線の代表の1人と看做され批判される。1977年名誉回復。
- 19) 五七幹部学校とは，1968年5月の毛沢東の「五七指示」を記念してつけた，幹部の思想改造用の集団農場のこと。軍隊は大きな学校であり，政治軍事文化を学び，生産活動をおこなうこと。また，労働者農民学生機関幹部も皆同様の学習をしなければならない，というのが「五七指示」である。
- 20) 李季（1922～1980）河南省唐河の人。延安時代からの代表的な詩人。民謡をベースにした「王貴と李香香」が代表作。
- 21) 張兆和（1910～2003）安徽省合肥の人。名門のお嬢さんであったが，沈從文の熱烈な求愛によって結婚した。作家。
- 22) この28通の手紙は，王炳根氏の整理により，『収獲』2005年第5期に発表された。
- 23) 同（注）12.
- 24) 劉徳風とも書かれる。中国作家協会の職員。
- 25) 原文は「肉鬆」。豚肉をほぐし，乾燥させてから，みりん・砂糖・塩・醤油などで調味して煎りあげたもの。中国の南方の人の好物。
- 26) 沈從文（1902～1988）湖南省鳳凰の人。湖南省西部のミャオ族の民俗を描いた作家。「辺城」が代表作。30年代から北京派作家の領袖と看做される。建国後には筆を折り，『中国古代服飾研究』を出した。張兆和は夫人である。
- 27) お手伝いのおばさんの名前。
- 28) 陳恕は冰心の次女・呉青の夫。北京外国語大学英語教師。「図：謝冰心親族図」を参照されたい。
- 29) 北京海淀区にある地名。新疆から移ってきた人たちが多く住んでいた。
- 30) 冰心の一番上の弟・為涵の娘・宗菊のこと。
- 31) 同（注）24.
- 32) 長男・宗生の妻。「図：謝冰心親族図」を参照されたい。
- 33) 冰心の孫に当たる，次女・呉青の息子。孫たちについては「図：謝冰心親族図」を参照されたい。
- 34) 冰心の長女・呉冰のこと。「図：謝冰心親族図」を参照されたい。
- 35) 費孝通（1910～2005）江蘇省呉江の人。現代中国の社会学，民族学などの創始者。呉文藻の弟子。1957年には右派分子とされる。1988年には「中華民族多元一体構造論」を発表。中国民主同盟主席。
- 36) 「我的老伴——吳文藻(二)」卓如編『冰心全集』（海峡文芸出版社，1999年4月，豪華珍藏本全9卷）第8卷 48頁
- 37) 当時は，学業偏重を阻止するために，若者は先ず人民公社などで働いて肉体労働に参加

## 文革中の謝冰心（王）

しなければならなかった。そして、その単位に認められ推薦されて、初めて大学に行く資格が出来た。そういう学生を「學員」と言った。

- 38) この家計簿の発見も、冰心の遺留品の中にあったと言う。  
貴重な資料であるから、早い時期の公表が望まれる。
- 39) 「因為我們還年輕」という詩は、卓如編『冰心全集』（海峡文芸出版社、1999年4月、豪華珍藏本全9巻）の第6巻 569～572頁に見られる。1972年12月17日の香港『大公報』に発表された。
- 40) 謝冰瑩（1906～2000）。湖南省出身。女性作家。1935年、早稲田大学に留学。日本の警察に反日行動により拘留されたこともある。アメリカで死去。名前が似ていることから、よく謝冰心と間違えられるが、まったくの別人である。『ある女性兵士の自伝』が代表作。
- 41) 梁実秋（1902～1987）。浙江省出身。文芸評論家。冰心と同じ時期にアメリカに留学。1928年、徐志摩らと『新月』月刊を発行、新月派の論客として活躍した。台湾でシェークスピア全集（40巻）の翻訳を完成した。  
この「冰心を想う」という文章は、冰心が死んだという誤報に基づいて書かれたものであるが、名文として有名である。
- 42) 趙浩生（1920～）河南省出身。米籍中国人。ジャーナリスト。
- 43) 聶華苓（1925～）湖北省出身。米籍中国人。女性作家。1964年渡米し、アイオワ大学で夫ともに「国際作家創作室」を作り、多くの中国人作家をアメリカに招いた。『毛沢東詩選』を英訳した。
- 44) 「4つの古いもの」（四旧）とは、1. 旧思想。2. 旧文化。3. 旧風俗。4. 旧習慣。の4つを言う。文革前には農村で四旧を打破する運動（四清）がおこなわれた。都市でも、紅衛兵の最初の攻撃目標が「四旧」であった。
- 45) 『世界日報』2002年10月6日号、羅子「謝冰心は心にもないことを話したのか？」。
- 46) 同（注）45。
- 47) 丁玲（1904～1986）湖南省臨澧の人。中国現代文学を代表する女性作家。『太陽は桑乾河を照らす』でスターリン賞を受ける。1957年の反右派闘争で、陳企霞や馮雪峰らとともに反党集団とされて、北大荒の農場に追放された。1979年名誉回復。丁玲は冰心が日本から帰国した後、中国作家協会に入る推薦人の一人である。
- 48) 同（注）45。
- 49) 「桜花与友誼」は、卓如編『冰心全集』（海峡文芸出版社、1999年4月、豪華珍藏本全9巻）の第6巻 575～579頁に見られる。1973年1月11日の香港『大公報』に発表された。
- 50) 倉石武四郎（1897～1975）東京大学名誉教授。中国語を中心として、戦後の日本の中国学をリードした。冰心を初めて女性の客員教授として東京大学の教壇に立たせた。
- 51) 老舍（1899～1966）本名は舒慶春。北京出身。北京の庶民の生活を描いた作家。「駱駝祥子」が代表作。1949年にアメリカより戻る。戯曲「茶館」などの佳作がある。1966年夏、紅衛兵のリンチと迫害を受け、自殺したと言われる。1978年に名誉回復。
- 52) 劉少奇（1898～1969）湖南省寧郷出身。元国家主席。文革中、資本主義の道を歩む実権

派として批判され、殺害された。1980年名誉回復。

- 53) 「生命從80歲開始」は、卓如編『冰心全集』（海峡文芸出版社、1999年4月、豪華珍藏本全9卷）の第7巻 205～206頁に見られる。これは『三たび小さな読者へ』の序文として、1980年10月29日に北京病院で書かれた。1980年第24期の『児童時代』に発表された。